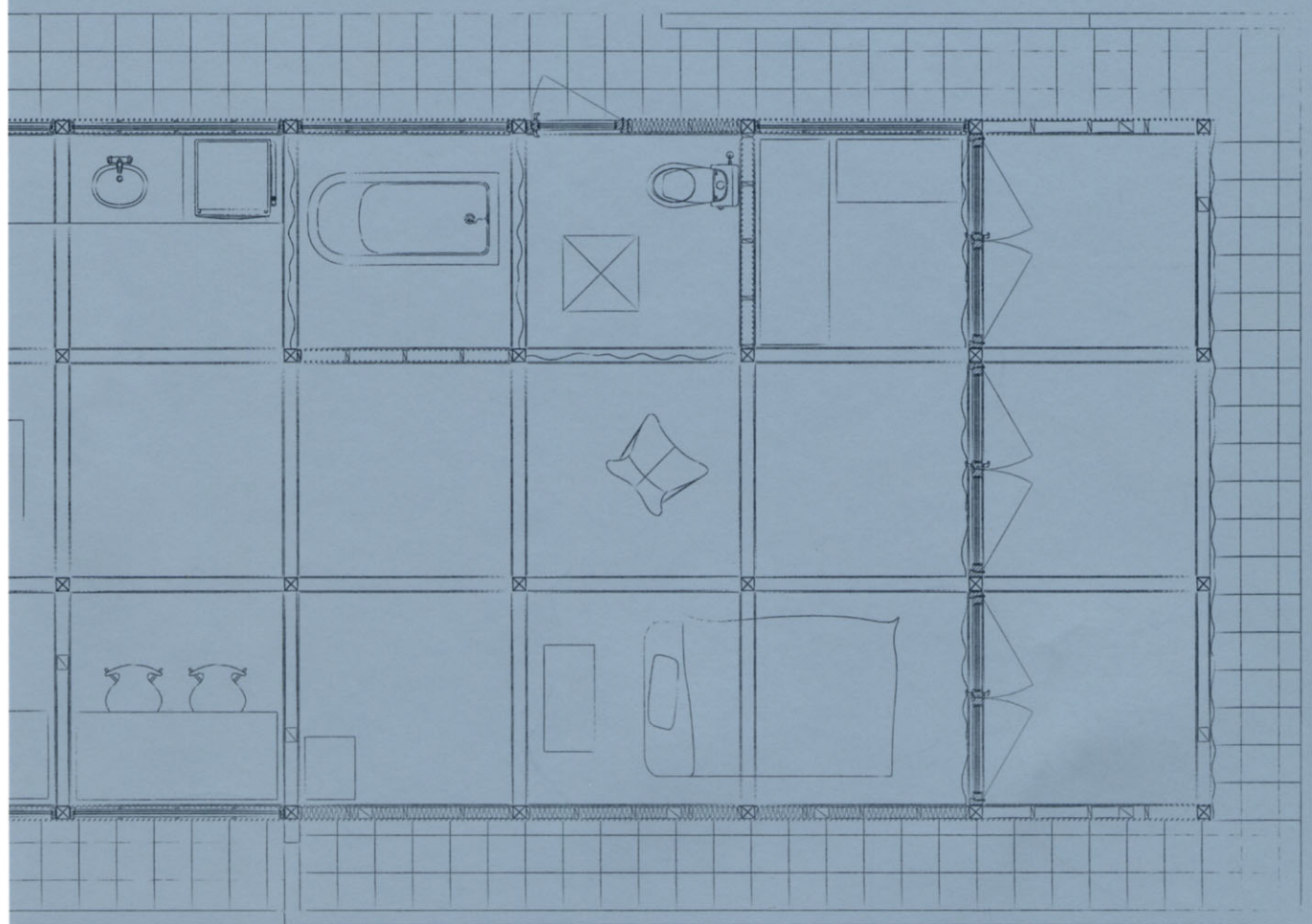


五十嵐淳／状態の表示

五十嵐淳建築設計事務所 編著



五十嵐淳／状態の表示

CONTENTS

記憶の集積—状態の表示 五十嵐 淳	6
矩形の森 2000	8
風の輪 2003	16
トラス下の矩形 2004	28
大阪現代演劇祭仮設劇場 2005	38
ANNEX 2005	46
tea house 2006	54
原野の回廊 2006	58
光の矩形 2007	68
相間の谷 2008	76
間の門 2008	88
house O 2009	96
house M 2009	104
収録作品データ	118

記憶の集積―状態の表示

五十嵐 淳

独立して間もない頃、全く何もわからず、ただ夢中でスタディし、模型をつくり、図面を描き、現場に行き、そして完成した「矩形の森」。気がつくと、あれから10年が経つ。その後、幾つかのプロジェクトに巡り合い、その都度、その「場」の「状態」における建築の必然性を見出したいと考え続けてきた。

今回、このような機会を得て、改めて過去の図面（データなど）を引っ張りだし、整理していくなかで、それぞれのプロジェクトに取り組んでいた当時の、様々な出来事や感覚がよみがえる。それは本当に些細なことも含めての「記憶」である。

設計時の思想や迷い、そして現場での出来事、時には天気、温度、湿度まで。本当にたくさんの情報や体験について、鮮明に思い出すのである。もちろん、図面や資料には、そのような記録が残っているわけでもない。

全ての「記憶」を呼び起こす「キッカケ」であり、設計の思想や現場の記憶が集積する「場」としての図面。それは同時に「状態」を「表示」する「場」でもある。

建築が他のクリエイティブな作業、例えば絵画、彫刻、音楽などに比べて、最も厄介だと感じるのは、作者が創作物を、直接その手でつくり出せないことである。これは当たり前の話だ。しかし若い頃の僕は、この事実を受け入れられなかった。そのとき、とても変なことを考えた。「自分が100人いれば、建築の全ての作業を、自分の手で実行することができるのに」という、ありえない妄想である。これは絶対に無理だし、そんな妄想が実現しなくとも、建築家の先輩達は、素晴らしい建築をつくり出しているのである。

建築という文化や歴史は既に存在していて、施工、そして設計を思考するという作業は、そうした歴史や技術をベースにしている。すでにある絶対的な前提のうえで、建築の新しさ、発見、気づきを模索するのである。

建築を考える時、人の「居場所」や、それらの距離感、光、空気、寸法、納まりなど、多様な事柄を同時に思考する。例えば、ここから入る光は、透明でボンヤリとした質感を持っていて、その光に照らされる壁、天井、床は柔らかな素材で、それに反射すると淡い色に変化するという光の状態。それとともに、居場所として心地よい平面の寸法は2,730mmくらい、天井高さは2,250mmくらい、とか。

それは構造のプロポーショナル、施工方法や効率、各部の素材とその取合いや納め方、家具や照明器具など、本当に多様な事柄と関係しあっている。それら全てを「状態」だと考えている。こうした「状態」を「表示」するための手段として図面が存在する。

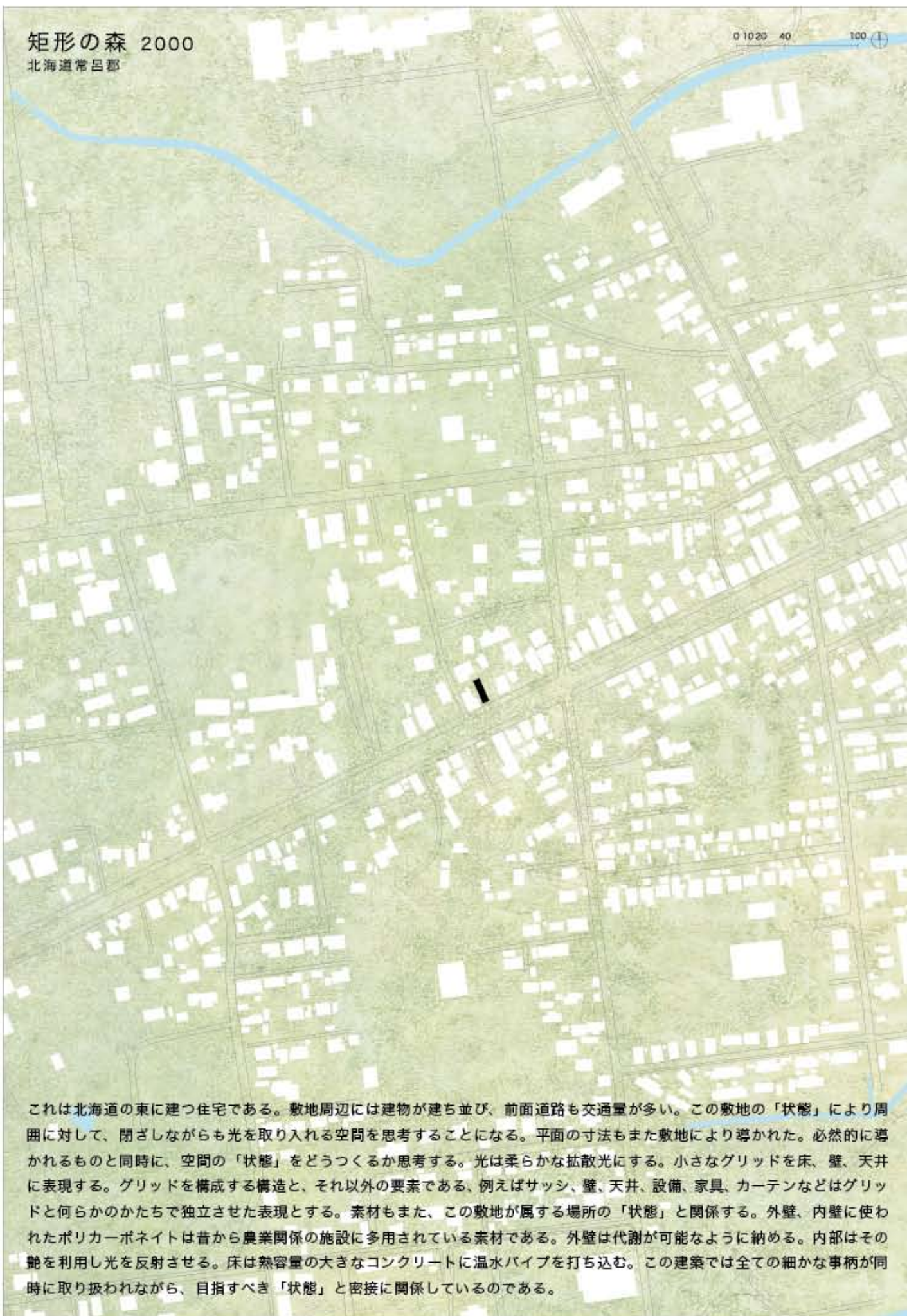
どんなに素晴らしい想像も、具体的な創造物にブレなく落とし込むことができないと、その強度も弱くなる。想像とこの膨大で多様な事柄を同化させることは100%困難だが、可能な限り近づこうと試行錯誤する。

建築は多数の他者の手によって実現する。その他者に伝える手段が図面であるという現実。図面はあるルールや技術を前提に描かれる。それは、建築の歴史や文化と同様、日々更新され続けてはいるが、建築を思考し、それを伝える原初的な作業であることに変わりはない。

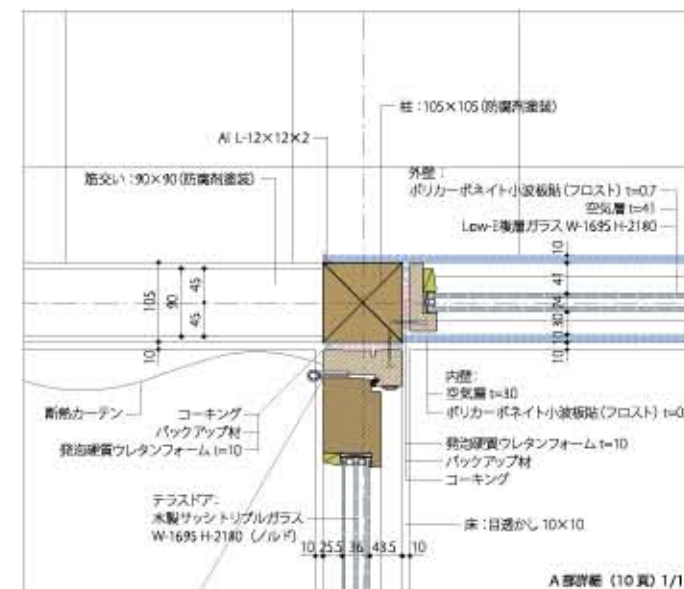
この原初的な作業のうえに、想像の中に見た「夢のかたち」を的確に落とし込もうと、必死になって、図面に「状態」を「表示」し続ける。プロジェクトごとに、その作業を繰り返す。

おぼろげで多様な「状態」のなかをさまよいながらも、自身にとっての違和感を消すように設計作業を進め、図面に描き示す。こうして「表示」された「状態」が、空間として建ち現れたとき、おぼろげでありながらも強い普遍性を見出すことができれば良いと考えている。

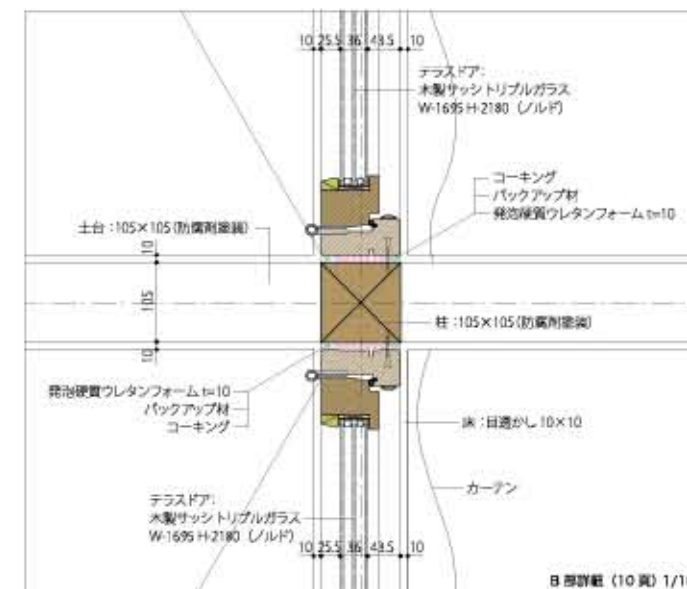
矩形の森 2000 北海道常呂郡



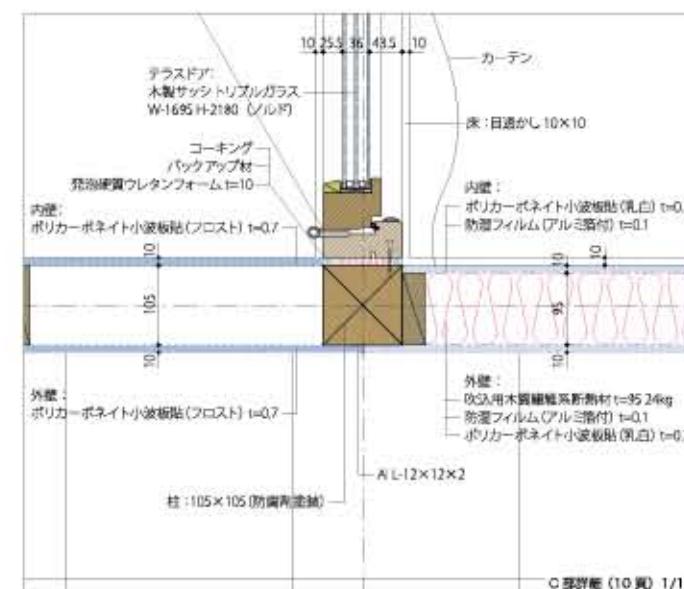
これは北海道の東に建つ住宅である。敷地周辺には建物が建ち並び、前面道路も交通量が多い。この敷地の「状態」により周囲に対して、閉ざしながらも光を取り入れる空間を思考することになる。平面の寸法もまた敷地により導かれた。必然的に導かれるものと同時に、空間の「状態」をどうつくるか思考する。光は柔らかな拡散光にする。小さなグリッドを床、壁、天井に表現する。グリッドを構成する構造と、それ以外の要素である、例えばサッシ、壁、天井、設備、家具、カーテンなどはグリッドと何らかのかたちで独立させた表現とする。素材もまた、この敷地が属する場所の「状態」と関係する。外壁、内壁に使われたポリカーボネイトは昔から農業関係の施設に多用されている素材である。外壁は代謝が可能のように納める。内部はその艶を利用し光を反射させる。床は熱容量の大きなコンクリートに温水パイプを打ち込む。この建築では全ての細かな事柄が同時に取り扱われながら、目指すべき「状態」と密接に関係しているのである。



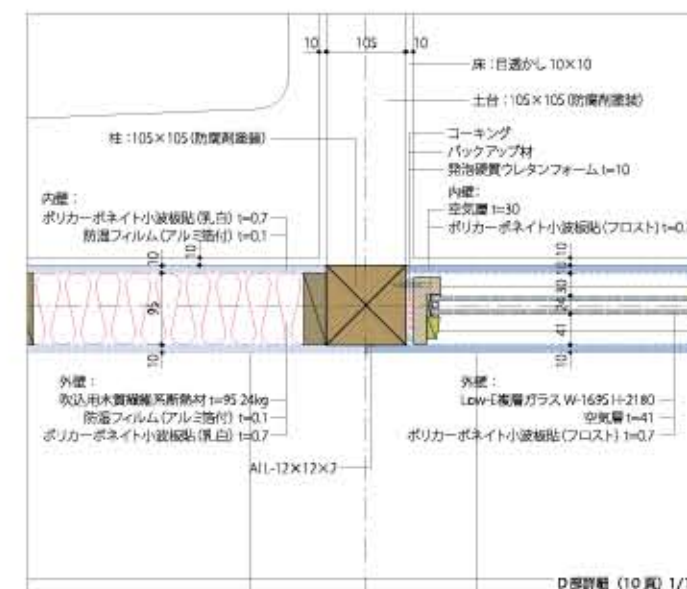
柱のコーナー部。色々な要素が取り付くが、グリッドである感覚を失わないような納めを考える。入隅は柱の角を視覚化。外壁は柱を覆うが素材の透明度によりグリッドを認識させる。



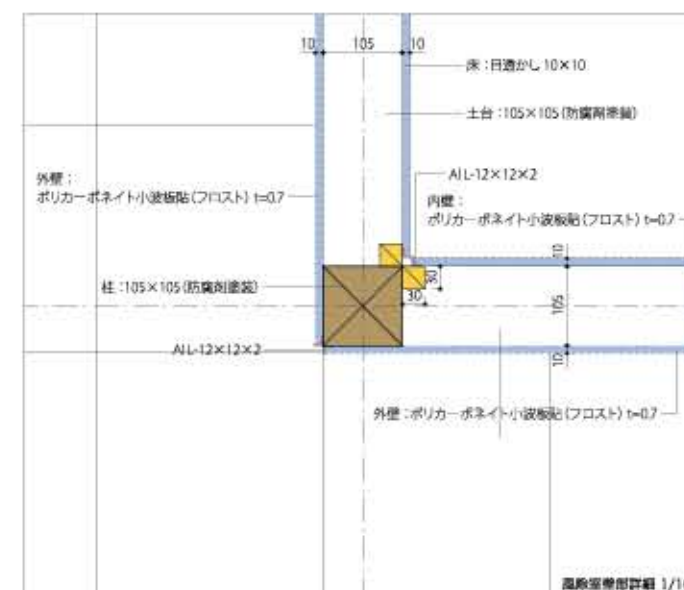
木製建具と柱の交点。建具の取外しが可能ないようにビス留めとする。柱と建具にクリアランスを取り断熱材を充填。グリッドの柱と建具を視覚的に分け、グリッドの認識を強めたいと考えた。



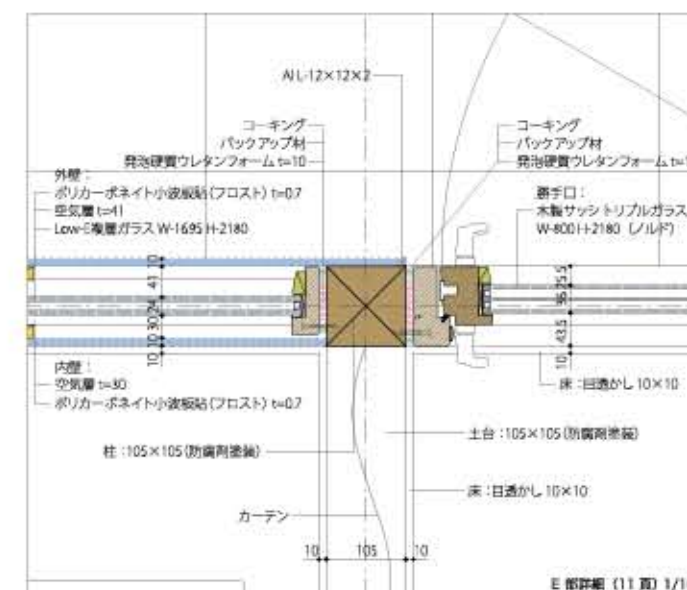
外部、内部そして半屋外空間の交差部分。不透明な壁には断熱材を充填。間柱は内部のポリカーボネイト厚さ分小さくし、入隅に目地を表す。外壁のフロストと乳白の切替えにアングルで目地を入れる。



光を透過する壁と不透明な壁の切替え部分。高断熱ペアガラスを内外共にポリカーボネイトで挟み、空気層を確保。トリプルスキンにより独特な拡散光をつくりたいと考えた。



風除室の出隅部分。非断熱空間のグリッドはポリカーボネイトで両面を覆う。出隅入隅部はアルミアングルにより納める。ポリカーボネイトの代謝を考慮した納め。



外部に直接面する木製建具と光を透過する壁の取合い。半透明な壁は高断熱ペアガラスを内外共にポリカーボネイトで挟みトリプルスキンとする。木製建具は他の部分と同様にグリッドと縁を切る。

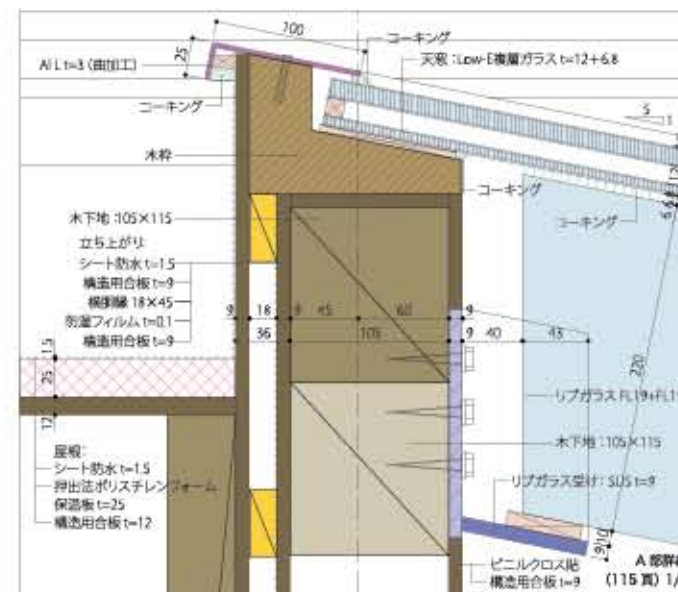


house M 2009

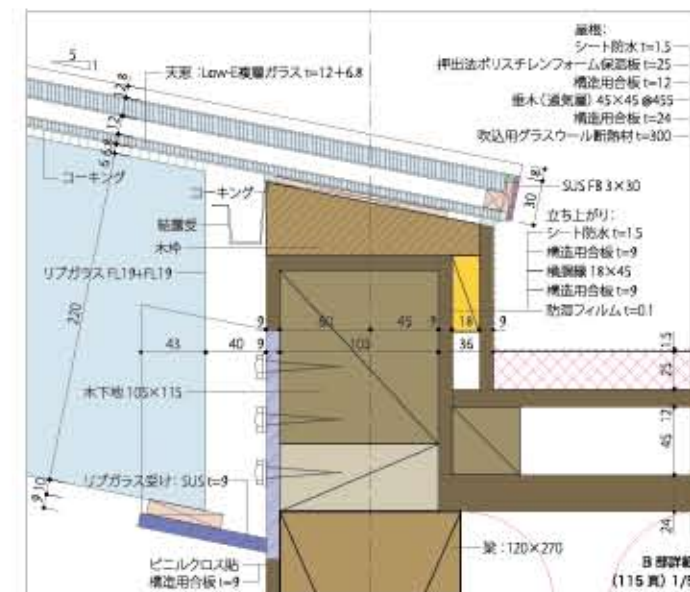
北海道旭川市

0 10 20 40 100 (1)

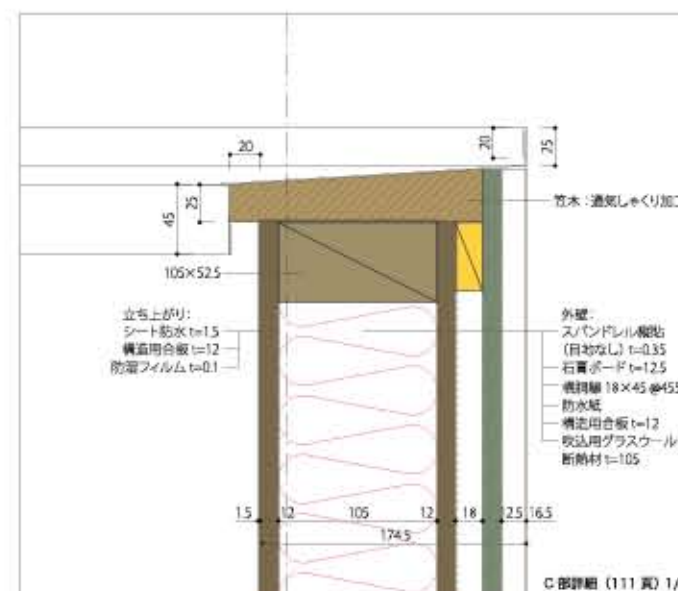
これは北海道の都市の中心部に建てられた住宅である。南側には7階建ての集合住宅、東側には隣地境界線ギリギリまで隣家が迫り、西側には現在使用されていない税務署の建物がある。将来、この税務署側には高層の集合住宅が建つことが予想される。このような「状態」において、住む人に安定した空間を与えることを目的として設計を進めた。静かであり安定しているが、閉塞的ではなく心地良い空間。以前、内モンゴル自治区のオルドスという場所において住宅を設計したことがある。それは大きく分譲された区画に大きな建築をつくるというもので、周囲にも大きな住宅が建つ予定であった。さらに気候条件も含めた周辺環境に厳しさを感じ、バッファゾーンをつくり安定した密室の内部空間を見出そうと考えた。今回の敷地の状態はオルドスとの共通点が多いと感じ、その考えを継承しつつ、この場での必然性を見出そうとした。風景、採光、プライバシー、防犯など、様々な条件を考えると、外部に対する壁面に開口をつくることの必然性が感じられず、密室に近い空間の状態を思考する。オルドスと同様に高い天井を持った部屋がトップライトのみにより外部と関わる空間。人の「居場所」と「空」との距離感がバッファゾーンとなる、そんな空間である。



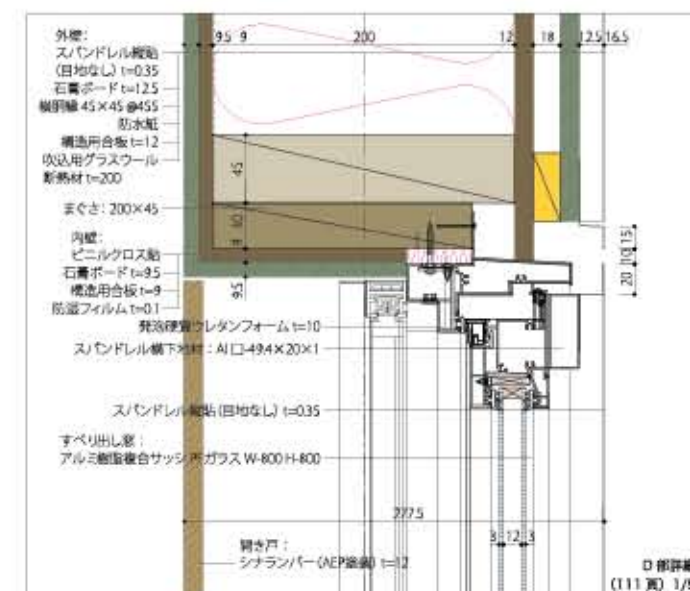
トップライトの水上側の詳細。雪が自重で落ちる最低勾配を取る。ガラスの枠は結露防止のために全て木製とした。ガラス単体では積雪荷重に耐えられないためガラスリブを設置している。



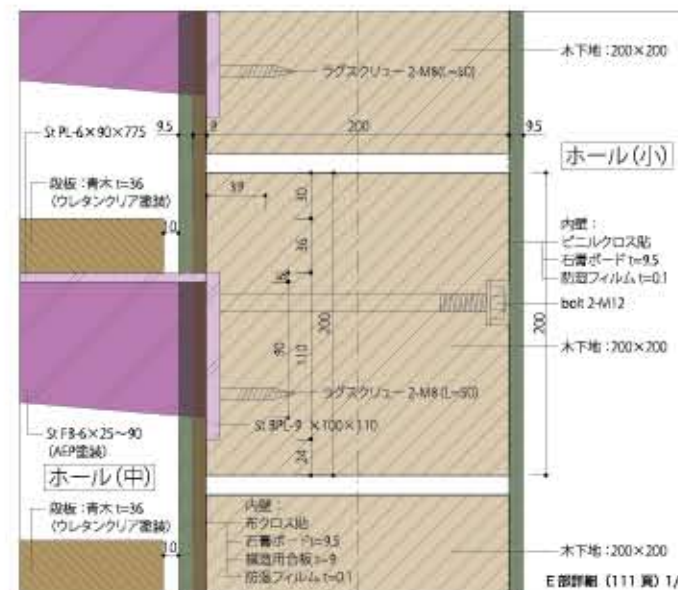
トップライトの水下側の詳細。室内の熱損失により雪が解けた水が、ガラスの先端に溜まり凍らないよう、ガラス押縁を付けずに納める。



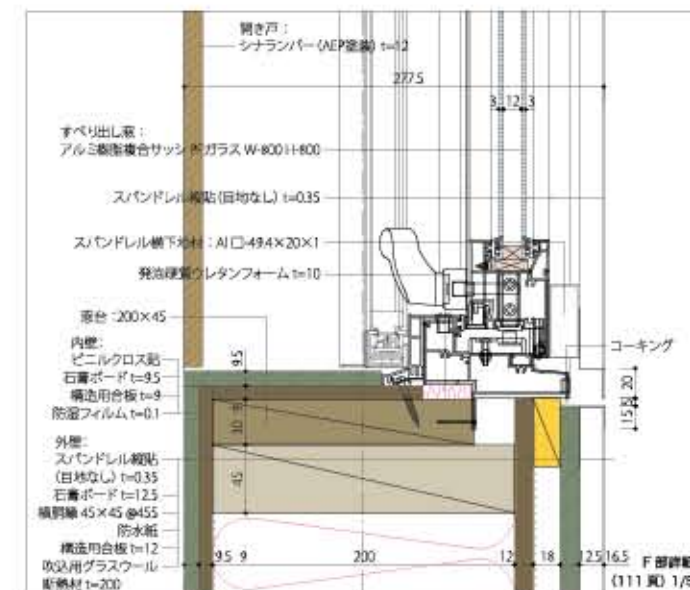
パラペット部分の詳細。外壁の頂部を曲げてパラペットに巻き込む。こうすることで壁側に流れる水の量が減り、箱のスカイラインも繊細になる。



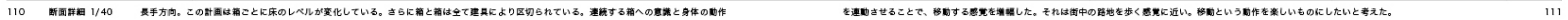
建築基準法上の換気窓の詳細。内部側には木製建具を付け、断熱効果を上げると共に壁と同化させる。外部側も外壁で覆い壁と同化させる。



キャンティレバーの階段詳細。段板を支える鉄の金物を200mmの角材にボルトで留める。この角材は柱と柱の間に横架材のように設置されている。



建築基準法上の換気窓の詳細。壁が厚いので網戸なども内部に納まる。内側の木製建具とサッシの間は空気層にもなる。外壁には通気層も確保している。





116 この路地空間の壁にのみ窓が付いている。そこから空間に入った光は壁や天井に反射して拡散光となり、リビングなどに降り注ぐ。



箱に挟まれ偶然に生まれたような路地空間。この天井高さは約 8,500mm あり、室内で最も高い。室内という感覚が消える空間である。